



## 豊太閤と博多

— 博多の太閤町割について —

鏡山 猛\*

天正15年(1556年)薩摩の討征を終った豊臣秀吉は、北に帰って太宰府より箱崎に着いた。このとき箱崎の社に陣して滞留すること20日におよんだ。当時博多の地は久しい戦乱を経て市街地は荒廃に帰っていた。秀吉は博多が古来海外交通の要港であることに着目し、博多の復興を企図して新たな町割を実施した。秀吉の町割は太閤町割と称して、博多人は恩顧を感じ、現に豊国神社が町のなかにある。太閤町割に関する資料は二、三に止まらないが、当時秀吉にしたがった博多出身の神屋宗湛の日記によると、つぎのような意味が述べられている。

天正15年6月10日に関白秀吉は博多のあとを見るべく、箱崎の社頭よりフスタという南蛮船に乗り、博多に着座された。船に同乗した者はハテル兩人と宗湛その他小姓衆であった。博多の浜で贈物が献上されたが、そのうち銀子一枚ばかり召され、その他の物は博多に下された。同月11日より博多の指図を書き付けられ、12日より町割がはじまった。博多町割奉行衆は滝川三郎兵衛殿、長束大蔵殿、山崎志摩殿、小西摂州(行政)殿であった。下奉行30人あり。

さて当時町割に使用したと思われる間杖が豊国神社に所蔵されていた。これは博多の復興を記念すべき由緒のあるものであったが、おしくも今次大戦の火災に遭い焼失してしまった。幸に元九州大学医学部数授であられた中山平次郎博士が詳細な調査をされ、拓本なども残っていたので、戦後模作品が作られ同神社に奉納されている。この間杖は長さ6.54尺(曲尺)、幅1.2寸、厚さ0.8寸あり、一端より6.44尺の所に横線があるので、この長さが町割当時の1間に相当するのではないかとされている。またこの杖の一面につぎのような刻銘がある。

嵩(時)天正十五年丁亥林鐘(6月)中旬四日(14日)壬申除博多津町割吉辰 宗湛

この記銘によれば、天正15年6月14日が町割杖の使用はじめという意味であろうか。博多の市街地は現在南

\*九州大学教授 文学部

北に長い短冊割の傾向が残っている。このたびの大戦で博多の旧市街の大半は火災に遭って灰燼に帰し、いまは新しい都市計画によって復興しているが、戦前の町割りの大勢は記憶に新しい。戦前の地図類によっても太閤町割りのすう勢はうかがわれると思う。記録類では秀吉は博多を縦横10町に割ったとあるが、東西と南北の道路間隔幅員には差異があったという。すなわち縦長の短冊割りである。これは一種の長地割りで、古代における田地や都市の区画整理法と相通ずるものがある。7世紀中葉以降日本の水田平野に施行された方格地割りは、条里制によれば単位区画は60間の正方形であるが、これを10等分した面積1反歩は長地の形をとっていた。古代都市平城、平安両京も条坊区画の単位は方形である。ただし坊の小割りは長地形である。

博多の街の歴史はきわめて長いので、秀吉以前にも整備された道路網があったに相違ないが、それを具体的に示すような資料はない。しかし太閤町割りを踏襲した戦前の博多の道路は、互に直角に交わる東西—南北の道路に限られていた。ここに東西、南北といったが実際には偏度がいちじるしい。N28°Wで、この偏度のもつく所は太宰府防衛のため築かれた水城堤防の方向N38°Wに原因がある。水城は太宰府の草創期に築造され、間もなくこれを基点として福岡平野に条里区画が実施された。博多の町割りの古制も、この条里の延長線に支配されたものであろう。現在の博多の町の北半は中世以降の沖積地である。太閤により新しい町割りが行なわれたが、この道路方向については条里区画に影響されたが約10°の差がある。また街衢の細部は尺度の相違もありかなりの新機軸がみられる。

太閤の博多の町割りと対照して興味のある問題は、京都の御土居と称する防塁と市街地の区画である。これまた太閤の企画するところで、都市防衛と道路整備の二つの面が重視されている。博多でも秀吉の頃町の南辺の防衛濠が掘り割られたようである。貝原益軒は「筑前続風土記」においてつぎのように記している。

凡そ博多の津は異族防禦の所として、且つ太宰府への道路なれば、北を外面とし、南を内面とし、町わり

は南北を縦とし、東西を横とせり。又南の方の外郭に横二十間余の堀の跡ありて、瓦町の西南のすみより、辻堂の東に至る。是南方の要害の固めなり。其土堤今もあり。此堀を房外堀と号す。白杵安房守鑑賢といひし人ほらせたる故なりといふ。然れば元龜天正の頃始めて掘りしなるべし。」

なお、続風土記にはその堀は明暦の初め頃埋れて水田になったが、元禄当時はまだ堀のあとが見えていたと記している。さらに西一面にも堀があったが、これも埋れてわずかに痕跡を止めていたという。ジョンセーリスの「日本渡航記」にはつぎのような記事がある。

博多という町には堅牢な城があつて、それは自然石で築かれているが、その内には大砲もなく、兵士もおらぬ。それは周囲に深さ5尋、幅その2倍位の壕があつて、跳橋があり、修理がよく行届いている。この市は城壁以内のロンドン位の大きさに見えた。家屋は大そうよく建築されて平らであるから、市街の一端から他端まで見通される。ここは人口甚だ稠密で、人々は甚だ穏和丁寧である。(村川堅固氏訳本による)

秀吉の博多復興の計画は単なる都市計画でなく、気宇広壯である。彼が海外の情勢を判断して心中に懐いた対外政策の一拠点として、ここを重視したと思われる。博多滞在が2旬におよんだのも故なしとしない。この滞留中に彼は対馬の宗義智を朝鮮に遣わして、使節の来朝を促しているのはその政策の一つのあらわれである。

実地について博多の町割りの古い姿を止めている所は少ない。ことに北半部は今次大戦に際してほとんど焼失してしまった。ただ明治年代の字図が市役所にあつて、博多部は1/200の縮尺であるから、かなり細かい屋敷割りまでわかる。幸に道路幅と町幅が間数で記入してあるのでこの数値をたよりに明治年代の旧態を調べることにした。

第一に道路の幅員についてみると図は平行線で描かれているが、記入の数値は10間前後の間隔で計ったものが多小の出入がある。これは現在の道路のように側溝などがなく、家の塀や壁が一直線に並んでいなかったことを示している。あるところでは道が平行線で描かれないで、克明に1軒1軒の出入りを描いた所もある(たとえば麴屋町中央の道路)。

つぎに博多町割りの例として字図の一部を抽出してみよう。

釜屋町南端の道路(東より記入の数値, 単位は間)

2. 2.2 2.1 2 2 17.5

平均 2.01 推定値 2.0

釜屋町中央南北道路(北より)

2.4 2.6 2.9 3 3.2 3.3 3

平均 2.91 推定値 3.0

芥屋町中央南北道路(北より)

1.5 1.8 1.6 1.5 1.5

平均 1.58 推定値 1.5

古溪町中央東西道路(東より)

2.4 2.5 2.5 2.5

平均 2.5 推定値 2.5

古溪町中央南北道路(北より)

1.6 1.45 平均 1.525 推定値 1.5

奥小路中央南北道路(北より)

2.1 2.3 2.5 2.5 2 1.7

平均 2.2 推定値 2.0

奥小路中央東西道路(東より)

2.2 2.5 2.8 2.35 2.4

平均 2.45 推定値 2.5

女家町東西道路

2.3 2.6 2.35 2.5

平均 1.60 推定値 1.5

女家町南北道路

2.1

推定値 2.0

鏡町南北道路

2.1 2 2 平均 2.03 推定値 2.0

上記の諸例でみると道路の計画幅員は1.5間, 2間, 2.5間, 3間の4種類に分けられる。これを南北路と東西路に分けてみると、

南北路 3間1カ所, 2間3カ所, 1.5間2カ所

東西路 2.5間2カ所, 2間1カ所, 1.5間1カ所

となる。博多の路が南北を広く東西を狭くとあるがこれは比較的事実として、南北路でも1.5間の小路もある。3間の大路は南北に幾すじかはあつた。その多くは400尺間隔で南北大路がつけられていたようである。

つぎに道路計測に用いられた尺度はどのようなものであろうか。それには道路の幅員が一定していないと都合がわるい。しかし平均値として過長なものが多いが、以上の平均値からみると1間は約3%の延びしかないようである。

つぎに町幅の記載あるものを拾ってみるとつぎのようになる。

釜屋町東西幅  $16.1+3+15.8=32.2$  間 ……④

(道路をはさんで左右の幅が別々に書いてあるので3つの部分を加えた計数を示す。和算のないものは道をふくまぬ町幅である)

釜屋町南北幅  $25.8+2.2+35.8=63.8$  ……⑤

芥屋町東西幅 34.3 34.6 平均 34.45 ……⑥

女家町東西幅	30.15	
	$14.9+2.1+12.8=29.8$	………㊸
奥小路東西幅	35.5	………㊹
奥小路東西幅	$17.55+1.7+16.3=35.55$	………㊺
壹台南北幅	421	………㊻
南北幅	$25.3+2.0+16.0=41.5$	………㊼
古溪町東西幅	32.35	………㊽
	$14.45+1.1+17.15=32.7$	………㊾

以上計数のうち㊸㊹㊺㊻㊼㊽はほぼ同じ間数を示し㊾は㊸～㊽の約2倍になっている。いま近似数を列挙するとつぎのごとくなる。

(32.2) (31.9×2) (34.6) (35.5) (35.55) (32.35) (32.7)

以上の平均値は 33.54 間で、201.24 尺ほぼ 200 尺となる。恐らく博多町割りの基準は 200 尺の倍数、400 尺をもって計画され、その中央を 2 分して 200 尺ごとに小路をつけたものと思われる。したがって小路を挟んで両側が 200 尺という町幅が博多浜部の理想ではなかったであろうか。これは現在町の区分や道路間隔からみてのルールと推測される。

400 尺の町幅は町割杖をもって仮に 60 間とすれば 1 間は 6.66……尺となる。豊国神社にあった杖の長さは全長 6.54 尺であるから、この単位で 30 間をはかれば 32.7 間となり、古溪町の東西幅の計数(上記 ㊾)と一致する。

以上字図からの任意択訳によって得られた数値から、町割りの理想はつぎの 2 つに要約できるであろう。

- ① 町割りは方 400 尺の方形割りを最大区とする。
- ② 道路幅は 3 間より 1.5 間に至る間、0.5 間の差をもって 4 種とする。

このような推測図からいえば道路を挟んでの町の奥行きは平均 200 尺すなわち 33.33……間である。奥行き 33 間と称する屋敷は旧博多の町屋に多かったのは事実である。間口は 2～3 間の狭いものが多く奥深い長地割りの特性を持っていた。このような細長い屋敷地では、土間または通しの道が家屋内の一侧にあり、これにそって 3 室位の部屋が前後にならんでいた。その奥には中庭があり、奥座敷または離れあるいは倉庫の類が最も奥に建てられるという配置が多い。明治年間の博多の町並みの写真を見ると、切妻平入りの屋根が見事に連っている。いまでも古い町の名残の存している所では同様である。

さて家作の奥行きに関して門割りの記録があるので引用しよう。享保 2 年日付の神屋文書に「表口拾三間入三拾間老ヶ所、右其方先祖宗湛屋舗於奈良屋番古来より無役に候」云々とあり、奥行 30 間とあるは公称で、実は 6 尺 6 寸の間杖で計ったものでなくてはならぬ。太閤町割りの際に間割りの制度に一定の均分制があったかどうか

か明らかでない。博多記によれば、

御免許屋敷之事として

一. 表口十三間半 太閤様より永く町役を除かれ  
今に至り替る事なし 神屋宗湛

一. 表口十三間半 太閤様より右同所に免許を蒙  
る 嶋井宗室

(中略)

一. 表口三間 長政公より免許にて今しかり鏡町  
にて

吉田宗富

と列挙される所をみると、貧富や身分に応じて広狭の差があったとみるべきであろう。

さてこのような博多の町割りを見て想起されるのは京都の太閤町割りである。

秀吉は天正 13 年京都の大内裏のあとに聚落の邸を営み、落成後九州に下ったが、天正 15 年 9 月には京に還って新邸に入っている。当時京の市中は博多と同じく久しい戦乱を経て廃墟と化した所が多かった。秀吉はここに復興を志し、新たに京のまわりに土堤をきずいて防備のかまえをはじめた。土堤は「お土居」とよばれて門を開くこと 7、全長 5 里 26 町余に達した。築堤の着工は天正 19 年 1 月のことであった。このような防備工作は博多の堀濠と同様の効果を齎らすものであった。お土居とともに秀吉は京の町割計画を実施した。もともと京都の街は平安京として条坊の制が確定し、縦横に大小路が走り、方形町割りが完成していた所である。一坊は方 400 尺で坊内は縦を 4 等分して 1 行、2 行、3 行、4 行とよび横を 8 等分して北より 1～8 の番号をつけた。坊内は 32 の短形の町に区分された。4 等分すれば、中央に路をつけないと道に面した家並ができない。秀吉はここに着目して縦(南北方向)に京中を貫通する坊内の道路をつけた。したがって道路の間隔は 200 尺となり、背なか合せの奥行の長い家がならんだ。ここでも屋内の方に通し庭があり、部屋は一列に門口より奥にむかってならぶ結果となった。これは博多の間取りと同じで、「ウナギ住イ」と俗称されるようになった。

博多の町割りが方 400 尺であったことは平城、平安の古制と軌を一にしている。両京ともに道路をのぞいた方 400 尺が一坊の大きさである。平城京に先だつ国都としては藤原京が条坊の制をとっていたと推定されているが、この一坊の広さは方 360 尺=60 間であったようである。大宰府の都城もまた条坊を称しているが、一方 360 尺である。この 360 尺の広さは当時(大化以後)の耕地整理(条里制)によって区分された区画と同じ地積となる。条里の遺構は博多の南郊より大宰府水城におよんでいるが、正確に一里の長さは曲尺の 360 尺であり、6 尺

1間として正しく60間である。平城平安の都はこれに対して400尺の広さに広げられた。博多の町割りもこの郡制にのっとったようであるが太閤以前にこのような町割りの実績があったかどうか不明である。諸般の事情からみると太閤以前に400尺等分の街があったとは考え難い。現在の博多の中央には冷泉津袖湊とよばれる港があった。東西に走る水道があって、水道の北部は沖の浜とよばれる新しい洲が陸化しつつあったようである。このような地形を考えても太閤以前に京都に類した都制が行なわれたとは考え難い。古代博多の中心地は現在の福岡市で港は現在の福岡港付近がさかえたと思われる。外蕃応接の鴻舩館も現在の黒田城跡にあった。黒田入国以来那珂川を境として東福岡の武家町に対し、西博多は商人町であった。博多の町も古代末期には土地も狭く条坊に類するものが早くよりあったと信じ難い。とすれば博多町割りのはじめはやはり秀吉に求めなくてはなるまい。王朝時代の都市、恐らく平安の都京の姿を描いて復古的な計画をしたのが博多の町割りということになる。このような着想をした人物は恐らく秀吉である。秀吉の都市

復興の著例として博多と京都をながめてきたが、同じような区分が江戸でもあったことを付記しておこう。頃も同じ天正19年入部した家康によって江戸の町割りがはじめられた。天正日記によれば天正18年9月1日の条に「本町通り絵図仰せ付けらる。40丈にわり申すべきむね云々とあるごとくここでも方400尺というのが江戸町割りの基準であった。本町は今日の東京都中央区で、いまも町名はそのまま残っている。当時開かれた町は南は日本橋より北筋違橋に至り西常磐橋より北両国あたりまでという(東京市史稿)。

江戸時代の町の実測図をみると400尺の町を60間と明記している。とすればこの間は6.66尺でなければならない。これまた博多の町割りと関連した問題である。天正の頃相ついで行なわれた町割りが博多—京都—江戸を代表として相関連する所が多い。博多は秀吉の創意による計画も多かったことかと思われるが近世初頭の都市計画史のうちでは、先駆的な役割りを果すものであろう。(1965.5.29・福岡市民会館にて講演)

東北大学教授 工学博士 河上房義著

# 土質工学計算法

A5判 254頁 上製  
定価 650円 千120円

## 改訂版

本書は、同氏の著作にかかる「土質力学」の理解をいっそう深めるため、数多くの演習例題・問題を収めたものとして、すでに10版を重ねてきたが、その間、用語の改正、規格の改正・追加などがあり、現状に合わない面が出てきた。それで、記述の不正確・不備な所を修正も含めて、今回大改訂を行なった。

〈内容〉 1. 土の間ゲキ、含水量、比重および密度 2. 土の粒度およびアッターベルグ限界 3. 土の分類 4. 土のせん断抵抗 5. 斜面の安定 6. 土圧 7. 基礎の支持力 8. 基礎の圧密沈下 9. クイ基礎 10. 土中の透水と排水 11. 土の締固め 12. 路床および路盤 土質試験方法(JIS A1201~1219)他

工学博士 内田一郎 著  
**道路工学(改訂版)** A5 312頁 上製  
定価 800円 千120円  
改訂に当っては、統計・法令・規格に関連する事項および用語を全く一新した。その他新しい技術を内外に亘って収録した。

古川一郎 著  
**橋梁工学(改訂版)** A5 400頁 上製  
定価1000円 千120円  
本書を発売以来6年を経過し、その間小修正を重ねていたが、各示方書が一新され、新技術が開発された機会に大改訂を行なった次第である。

成瀬勝武他監修  
" "  
" "  
河上房義著  
小貫義男著  
同委員会編  
岡積 満著  
" "  
水野高明著  
安芸皎一監修  
杉本礼三著  
" "  
土木設計データブック ￥4,000.  
土木施工データブック ￥4,800.  
世界の橋 ￥4,000.  
土質力学(改訂版) ￥800.  
土木地質 ￥800.  
測量辞典 ￥1,000.  
応用測量学 ￥720.  
一般測量学 ￥650.  
鉄筋コンクリート工学 ￥1,000.  
測量実務叢書(全12巻)平均 ￥800.  
応用力学演習(上・下)各 ￥800.  
応用力学 ￥800.

## ◎ 目 録 呈 ◎

東京都千代田区  
神田小川町3-1 0

森 北 出 版

振替 東京 34757  
電話(292) 2601(代)